

Psychological × Coming-of-age
青春は、声にならない救難信号。

病室の外で、 彼女はついに 優しく生きろと 命じられた。

第1巻・塾の雨夜

著者／
大有株式会社

昇進学塾

中学部 高等部

冬期講習 受付中

小中高 全学年対応
集団授業・個別指導
自習室完備

TEL 03-XXXX-XXXX

← 入口はこちら

1

Volume One

もし優しく命じてもらえるのなら、
今度こそ、自分を諦めたくなれない。

第一卷《塾の雨の夜》

目次

序章 雨はまだ降り始めている

第一章 塾の階段口（かいだんぐち）の雨

第二章 ホットココアとLINEを交換した夜

第三章 初めてののお金の手渡し（かりいれ）

第四章 親にだけは言うてはいけない

第五章 空っぽの財布

第六章 父が部屋のドアを押し開けた夜

第七章 彼は私を好きだと言った

第八章 鏡のなかの見知らぬ少女

後記 救い出された人が、再び生きていくことを学ぶために

第一巻《塾の雨の夜》

序章 雨はまだ降り始めていない

白石美羽が初めて病院の廊下で雨音を聞いたとき、窓の外には実際には雨は降って
いなかった。

四月の東京。空は低く、どんよりと曇っていた。

雲の層は病院ビルの外側に低く垂れ込め、まるでもう長いこと干していない灰色の
布団のようだった。ガラス窓の外では、街路樹のみずみずしい新緑が風に揺れ、道路を
行き交うタクシーが、湿気を帯びたアスファルトの上を次から次へと滑るように走り
去っていく。空気の中には雨の匂いが混じっていたが、雨粒はまだ落ちてこなかった。

廊下の中は非常に静かだった。

完全に音のない静寂というわけではない。

ナースステーションの方からは時折、キーボードを叩く音が聞こえてくる。ワゴンの
車輪が床を通り過ぎ、かすかにゴトゴトと軽い音を立てる。どこかの病室ではテレビ
の昼のニュースが流れており、その声はドアに遮られてぼやけて聞こえた。消毒液の匂
いが、白い壁、蛍光灯、清潔なシーツの匂いと混ざり合い、廊下全体をまるで何度も拭
き清められた真っ白な紙のように見せていた。

美羽は自動販売機の前に立っていた。

彼女は実習用の白衣を身にまとっていた。

胸元の名札には、こう書かれている。

【白石美羽／実習生】

その文字はプラスチックのケースにぴったりと平らに収まっていた。今朝、家を出
る前に、母親が名札が傾いていないか確認してくれた。父親は玄関で彼女の靴を見つめ
ながら、「靴底は滑らないか？」と一言かけてくれた。

あのとき、彼女は「滑らないよ」と答えた。

しかし今、病院の廊下の自販機の前に立っている彼女は、自分の靴底がまるでごく
薄い水の上に乗っているかのような感覚を覚えていた。

あと一歩でも前に進めば、そのまま沈んでしまいそうだった。

「白石さん、何飲む？」

宮野彩葉の声が、不意に横から聞こえた。

彼女は美羽が通う看護専門学校のクラスメイトで、ショートヘアの、スクールバッグに賑やかなマスコットをたくさんぶら下げている女の子だ。初めての病院実習だというのに、彼女はすでに引率の先生と冗談を交わし、ナースステーションの近くで自販機を見つけ出していた。まるで初めてのマップでも、砂糖のありかを正確に嗅ぎつけられる小さなオレンジ色の狐のようだった。

「今日の廊下、冷蔵庫が修行でもしてるみたいに冷え冷えだね」

彩葉はそう言いながら、自販機に硬貨を投入した。

自販機の内側が白い光で照らされている。

ガラスの向こうには、何列もの飲み物が整然と並んでいた。

水。

緑茶。

ブラックコーヒー。

スポーツドリンク。

ホットココア。

ホットミルクティー。

その温かい飲み物の列の下には、オレンジ色のラベルが灯っていた。

【あたたかい】

美羽の視線は、そこで止まった。

「私はいいや」

彼女は自分がそう答えるのを聞いた。

声はとても小さく、まるで床にうっかり落ちた紙クズのようだった。

彩葉が振り返って彼女の顔を見た。

「本当に？ ちょっと顔色悪いよ？」

「大丈夫」

その三文字の言葉は、あまりにも使い慣れていた。

慣れすぎていて、思考を挟むまでもなく、自然と喉から転がり出てくる。

大丈夫。

平気。

いない。

気にしないで。

白石美羽の十八年の人生の中で、最も熟練した言葉の数々は、そのほとんどが他人を外側に押し留めるためのものだった。

彩葉は深く考えなかった。

彼女は自販機に向き直り、二秒ほど迷ってから、ホットミルクティーのボタンを押した。

「じゃあ、私はこれにしよう。ホットミルクティーって、なんか安心するよね？」

自販機の中から機械音が響く。

次の瞬間。

ガタン。

缶が落ちる音が、取り出し口に響いた。

ごくありふれた音だ。

病院の廊下では、毎日何十回、何百回と響いているだろう。ある人は水を買ひ、ある人はコーヒーを買ひ、ある人は温かいコーンスープを買う。それはただのアルミ缶がプラスチックの溝に落ちただけの音で、特別なことなど何一つなかった。

しかし、美羽は硬直した。

まず指先が冷たくなった。

続いて手のひら。

それから腕。

その冷気は一気に肩まで這い上がり、まるで目に見えない透明な蛇が、白衣の袖口から彼女の体の中へ潜り込んできたかのような感覚だった。

目の前の自販機が、少し遠のいていく。

白い廊下がぼやけ始めた。

消毒液の匂いが遠ざかる。

代わりにこみ上げてきたのは、冬の雨がアスファルトを叩く匂いだった。

濡れたテスト用紙。

半分壊れたビニール傘。

塾の階段の口にある冷たいコンクリート。

そして、彼女の手元にそっと置かれた、一本のホットミルクティー。

あのホットミルクティーは、ちょうどいい温かさだった。

熱すぎて持てないわけでもなく、冷めていて意味をなさないわけでもない。

それは一人の少年の手によって置かれた。その人は彼女の前にしゃがみ込み、近づきすぎず、冗談のようでもあり、そうでもないような、そんな絶妙な優しさを帯びたトーンで言ったのだ。

「大丈夫そうには見えないけど」

美羽の呼吸が、一瞬にしてキュッと縮まった。

遠くから雨音が聞こえる気がした。

ポツ、ポツ。

しとしと。

でも、窓の外には雨は降っていない。

「白石さん？」

彩葉の声が、彼女を少し現実に戻した。

美羽の目に、彩葉が手に持っているホットミルクティーが映った。缶のボディは淡いベージュ色で、側面にはティーカップのイラストが印刷されており、赤い丸いラベルには「あたたかい」と書かれている。

あまりにも普通だった。

普通すぎて、残酷なほどだった。

彩葉の表情が、気楽なものから怪訝なものへと変わった。

「本当に大丈夫？」

美羽は「大丈夫」と言おうとした。

彼女はそのつもりだった。

舌の先がその言葉の最初の音に触れかけてさえた。

けれど、言葉は出てこなかった。

喉がまるで、古びた一本の糸で縛られているようだった。

その糸は、かつてはとても優しかった。

かつては、誰かが差し伸べてくれた手のようだった。

後になって知ったのだ。それは実際には、人を締め上げるものだったのだと。

美羽は白衣のポケットをきゅっと握りしめた。

指先がポケットの布地の中で丸まる。

彩葉を心配させたくなかった。

初めての病院実習で問題を起こしたくなかった。

自販機の前に立っているだけで顔色を悪くするような生徒だと、先生に思われたいくなかった。

彼女はもう十八歳なのだ。

十四歳ではない。

あの塾の階段の口でしゃがみ込み、泣き声を漏らすことさえできなかった中学生の女の子ではないのだ。

彼女は白衣を着ている。

実習生なのだ。

将来は他人を看病する立場になる。

だから、言うべきなのだ。

「私は大丈夫」と。

しかし、彼女が口を開こうとしたその瞬間、横から男の声が聞こえた。

「大丈夫そうには見えないが」

声は大きくなかった。

とても平坦だった。

けれど、まるで誰かが白い紙の上に定規で一本の直線を引いたかのように、潔く、はっきりと、余計な感情を一切交えずに響いた。

美羽は顔を上げた。

廊下の向こう側に、濃い色のスーツを着た一人の男性が立っていた。

年齢は二十代後半から三十歳手前くらいに見える。黒い短髪は清潔に整えられており、ネクタイも落ち着いた濃色で、胸元には入館証がぶら下がっていた。手には書類ファイルを抱えており、医師のようでもなければ、患者の家族のようでもなかった。

彼は彼女に近づこうとはしなかった。

距離は遠くもなく、近くもない。

人と人との間に、どれほどの空気(スペース)を残すべきかを、よく熟知しているようだった。

彩葉がハッと息を呑んだ。

「えっ？ あの、どちら様ですか……」

男性はすぐには答えず、ただ美羽だけを見つめた。

その瞳はひどく冷静だった。

冷酷なのではない。

冬の朝のガラスのように、透き通り、静かで、彼女の動揺に引きずられて揺らぐことがないのだ。

彼は言った。

「まず座りなさい」

美羽はハッとした。

それは命令だった。

少なくとも形式としては。

けれど、その言葉は彼女を怖がらせなかった。

どこかの秘密へと彼女を押しやることもなかった。

誰かを信じるように強要することもなかった。

「君にしかできない」と言うこともなかった。

ただ、一つの極めてシンプルな事実を、彼女の前に差し出ただけだった。

――君は今、まともに立ってられない。

――だから、座るんだ。

男性は彼女を一瞥し、さらに言葉を添えた。

「今の君は顔色が悪い。無理をして持ちこたえることだけを選択肢にするんじゃない」

無理をして持ちこたえることだけを選択肢にするんじゃない。

その言葉が美羽の耳に届いたとき、彼女は胸の奥で何かがかすかに震えるのを感じた。

とても小さな振動。

分厚い埃の中に埋もれていた、一つの鈴が鳴ったかのような。

彩葉がようやく我に返り、慌てて美羽の腕を支えた。

「白石さん、とりあえず座ろう？ 本当に顔色が真っ白だよ」

美羽は断ろうとした。

けれど、足の裏から力がすうっと抜けていくようだった。

彼女は結局、廊下の脇にある長椅子に腰を下ろした。

椅子の座面はひんやりとしていた。

彼女の白衣の裾が、膝の上にしな垂れる。

彩葉の手にあるホットミルクティーからは、まだわずかな湯気がゆらゆらと立ち上っていた。彩葉は美羽を見つめ、それからその男性を見つめ、まるで先ほど不意に何かの災害警報のボタンを押してしまったかのような表情を浮かべていた。

「私、先生を呼んでくる！」

彩葉はそう言い残すと、小走りでナースステーションの方へと駆けていった。

廊下に、つかの間の静けさが訪れた。

男性は美羽から数歩離れた位置に佇み、何があったのかを問い詰めることも、過剰な心配の色を向けることもなかった。

それが逆に、美羽にとっては少しだけ息をしやすいさせた。

彼は身をかがめ、彩葉が先ほど長椅子の脇に置いたホットミルクティーを拾い上げると、それを一瞥し、美羽の隣の席へとそっと置いた。

彼女の手は無理やり握らせるのではない。

「少し飲めば落ち着くよ」と言うわけでもない。

この缶の飲み物が「慰め」を意味するのだと、彼女の代わりに勝手に決めることもしない。

ただ、隣に置いただけ。

「飲みたくないなら、飲まなくていい」

彼は言った。

美羽はそのホットミルクティーを見つめた。

その瞬間、彼女は突如として泣きたくなった。

怖いからではない。

「拒絶(いらない)」という選択肢を自分に残してくれた人が、あまりにも久しぶりだったからだ。

十四歳のあの年、誰かが一本のホットミルクティーを彼女の手元に置いた。

あのときの彼女は、それこそが「見つけてもらうこと」なのだと思い込んでいた。

後になってようやく気づいたのだ。ある種の優しさは、少しずつ「負債(借金)」へと変わっていくのだと。

一口でも口にすれば、まるでその人の人生を丸ごと背負わされたかのような義理が生じてしまう。

だから、理解しなければならない。

信じなければならない。

助けなければならない。

秘密を守らなければならない。

相手が「僕にはもう君しかいないんだ」と言ったとき、自分の恐怖心を折りたたんで飲み込まなければならない。

けれど、目の前にいるこの見知らぬ男性は、ただこう言ったのだ。

――飲みたくないなら、飲まなくていい。

美羽はうつむいた。

指先は依然として冷たかった。

けれど、喉を縛っていたあの糸が、ほんの少しだけ緩んだような気がした。

「ありがとうございます……」

彼女はごく小さな声で呟いた。

男性は小さく頷いた。

「私は鷹見怜司だ」

彼は胸元の入館証を少しだけ真っ直ぐに直した。

「今日は院内で会議があつてね。たまたま通りかかったんだ」

鷹見怜司（たかみ れいじ）。

美羽は心の中でその名前を静かに復唱した。

その響きは、清潔な黒いインクが紙の上に落ちて、にじまずに留まっているかのようだった。

「白石.....美羽です」

彼女は無意識に自分の名前を返した。

鷹見は彼女を見つめ、それ以上は何も尋ねなかった。

「そうか」

そして、彼はそれきり言葉を発しなかった。

この沈黙は、不思議なものだった。

気まずいわけでもなく、冷淡なわけでもない。

どちらかといえば、一本の傘が開かれ、ちょうど頭上で止まっているかのようだった。彼女の肩に近づきすぎることなく、彼女の手に触れることもなく、ただ雨が彼女の身に直接降り注ぐのを一時的に遮ってくれているような、そんな沈黙だった。

彩葉がすぐに先生を連れて戻ってきた。

先生は緊張した様子で彼女の顔を覗き込み、低血糖ではないか、朝食はちゃんと食べたか、休憩室で少し横になった方がいいのではないかと、矢継ぎ早に尋ねた。美羽はその一つ一つに答えた。声はまだ少し上ずっていたけれど、少なくとも言葉を交わすことはできた。

鷹見怜司はその場に留まらなかった。

彼はただ先生に向かって、「彼女は先ほど自販機の前に立っていたとき、顔色が真っ白になっていました。まずは休ませることをお勧めします」と簡潔に説明した。

書類を引き渡すかのような、極めて淡々とした語気だった。

そして、彼は書類ファイルを手に、その場を立ち去った。

美羽は長椅子に座ったまま、彼の背中が廊下の角へと消えていくのを見つめていた。

濃い色のスーツ。

真っ直ぐな背筋。

速すぎず、遅すぎない足取り。

振り返ることはなかった。

自分を覚えておくようにと彼女に要求することもなかった。

彼女が最も脆くなっているときに、自分の存在を彼女の傍らに残し、いつか返さなければならぬ「刻印」に変えることもしなかった。

あのホットミルクティーは、依然として彼女の隣に置かれたままだった。

彩葉がそっと彼女の前にしゃがみ込んだ。

「白石さん、本当に心臓が止まるかと思ったよ。ホットミルクティー、嫌いだった？」

美羽は缶を見つめた。

長い沈黙の後、彼女はようやく口を開いた。

「嫌いなわけじゃないの」

「じゃあ、どうして？」

彼女は黙り込んだ。

廊下の窓の外では、雲の層がまた少し低くなっていた。

街全体が、まだ現像の終わっていない写真のように灰色に沈んでいる。

雨はまだ降っていない。

けれど美羽の耳には、すでに雨音が聞こえていた。

彼女は静かに言った。

「ただ.....昔のことを、思い出して」

彩葉はそれ以上追及しなかった。

そのことが、美羽を少しだけホッとさせた。

彼女は昔から、自分の「過去」を説明することがひどく苦手だった。

なぜなら、あの過去は、明確な始まりと終わりがある「事故」のようなものではなかったからだ。それはむしろ一陣の雨のようだった。最初はとても小さく、肩に落ちる瞬間にはむしろ優しささえ感じさせる。けれど、おかしいと気づいたときには、すでに服はびしょ濡れで、靴の中まで水で満たされているのだ。

先生は美羽を休憩室で十五分間休ませてくれた。



彩葉も一緒に付き添ってくれた。

あのホットミルクティーは、結局最後まで開けられることはなかった。

彩葉はそれを自分のバッグにしまいながら、少し申し訳なさそうに言った。

「これ、後で私が飲むね。じゃないと、この子がちょっと可哀想だし」

美羽はその言葉を聞いて、思いがけず、かすかにクスッと笑みをこぼした。

とても淡い笑い。

消え入る寸前の月のような。

けれど、確かにそれは笑顔だった。

それを見た彩葉は、曇り空の中に突然小さな青空が顔を覗かせたかのような表情を浮かべた。

「笑った！ 白石さんが笑った！ これぞ本日の病院実習における最大の医療の奇跡だね！」

「そんな大げさなこと言わないで……」

「だって、さっきの白石さん、本当に魂が定時退社しかけてるみたいだったんだもん」

美羽はどう返せばいいか分からなかった。

けれど、彩葉のにぎやかさは、彼女を傷つけることはなかった。

それは、ごく普通の騒がしさだった。

普通だからこそ、安全だった。

見返りを求めることもなく、彼女に特別な人間になることを強いることもない。

休憩室の窓の外には、やはり雨は降っていなかった。

彼女は病院の向かいにある通りで、車が灰色の長い列を作っているのを眺めていた。歩行者たちは開いていない傘を手に、足早に横断歩道を渡っていく。遠くの空では低い雲が渦巻いており、まるで降るべきか否かをまだ迷っている雨のようだった。

美羽はうつむき、自分の白衣を見つめた。

その布地は、眩しいほどに真っ白で清潔だった。

彼女はふと、この白衣がまるで他人から借りてきたもののように思えてならなかった。

サイズが合わないからではない。

白衣を身にまとう人間は、もっと強く、もっと明るく、もっと他人を労わることができる人でなければならないはずだと、いつも心のどこかで思っているからだ。

一本のホットミルクティーのせいで、病院の廊下でまともに立っていられなくなるような人間であってはならないはずなのに、と。

彼女は名札の上にそっと手を置いた。

白石美羽。

十八歳。

看護専門学校実習生。

四年前、彼女は十四歳だった。

あの頃の彼女はまだ知らなかった。ある種の優しさは温かい飲み物に似ていて、手に取った最初の一瞬はとても温かいけれど、後になって手のひらを火傷させるのだということ。

彼女はまた、知らなかったのだ。家に救い出された後も、人間が再び「生きていく」方法を学び直すためには、ひどく長い、途方もない時間が必要なのだということを。

あの頃の彼女は、ただ塾の階段の口でしゃがみ込み、半分壊れた傘を手に、前髪を伝ってまつ毛へと滴り落ちる雨水にじっと耐えていただけだった。

彼女はただ顔を上げ、一人の少年が自分の前に立っているのを見つめただけだった。

彼はホットミルクティーを差し出し、こう言ったのだ。

「大丈夫そうには見えないけど」

そしてあのときの白石美羽は、自分はようやく「見つけてもらえた」のだと、そう信じ込んでいたのだった。

窓の外空は、依然としてどんよりと濁っている。

雨はまだ、降り始めていない。

けれど記憶の中では、あの雨はとうの昔に激しく降り注いでいた。

あの年、雨は本当に、降りしきっていたのだ。

第一章 ホットミルクティーと塾の階段

十二月の東京、雨はいつも薄く降る。

夏のような轟音を立てて叩きつける雨でもなければ、台風の日のように傘を骨組みだけの標本にしてしまう雨でもない。それはまるで灰塵のように細やかな雨だった。急ぐこともなく、騒ぐこともなく、ただ静かにアスファルトや制服のスカートの裾、スクールバッグの側面に落ちては、少しずつ、少しずつ人間を濡らしていく。

白石美羽は校門の前に立ち、自分の靴の先を見つめていた。

上履きから履き替えた黒い革靴の表面は、雨水に濡れて薄い霧をまとったようになっていた。彼女が足先で軽く地面をこすると、水の跡が広がり、そしてすぐに新しい雨粒によってかき消された。

背後から声が聞こえた。

美羽が振り返ると、同じクラスの女子生徒が三人、傘を差して一緒に立っていた。彼女たちの傘の色はとても鮮やかで、一本はピンク、一本は淡いブルー、そしてもう一本の透明な傘にはクマのステッカーが貼られていた。三人はとても身を寄せ合っており、まるで移動する小さな暖かな光の塊のようだった。

声をかけてきたのは森下さんだった。

彼女はとても自然に、そしてとても客観的に（礼儀正しく）笑っていた。

あまりにも他人行儀なその態度に、美羽は前へ進むべきか、それともその場にとどまるべきか分からなくなった。

「うん、今日は数学があるから」美羽は言った。

「大変だね」森下さんはスクールバッグを肩へ引き上げながら言った。「私たちは今日、北千住にクレープを食べに行くんだ。駅の近くに新しくお店ができたんだって」

「そうなの？」美羽は自分の声ができるだけ軽快に聞こえるよう努力した。「美味しそうだね」

「そうだよ、今度機会があったら一緒に行こうね」

今度。機会があったら。一緒に。

「美羽、今日も塾に行くの？」

これらの言葉は、自動販売機の中で引っかかって落ちてこない飲み物のようだった。目の前に見えているのに、いくらボタンを押しても何の音も響かない。

美羽はうなずいた。

「うん、みんな楽しんできてね」

三人の女子生徒はさよならを告げ、傘を差して駅の方へと歩き出した。彼女たちは笑いながら、どのフレーバーが写真を撮ってアップするのに向いているかを話し合っていた。ピンクの傘が少し傾くと、淡いブルーの傘がすぐに寄り添って彼女を雨から守った。

美羽は立ち尽くしたまま、彼女たちの背中が人混みの中に消えていくのを見つめていた。

彼女はいじめられているわけではなかった。

教科書を隠されたこともなければ、黒板に名前を書かれたことも、トイレに閉じ込められたこともない。クラスの中ではむしろ「付き合いやすい（いい人）」とさえ思われていた。グループワークになれば誰かが声をかけてくれたし、日直の交代を頼まれることもあった。先生に名前を呼ばれれば、彼女はいつも真っ先に返事をした。

けれど美羽は知っていた。自分が誰かの輪の中に、本当の意味で足を踏み入れたことなど一度もないのだということを。

彼女はまるでお弁当箱のフタに貼られたラベル用紙のようだった。くっついてはいるけれど、中身の食べ物の一部ではない。

スマートフォンが震えた。

母親からのメッセージだった。

「今日はクリニックの終わりが遅くなりそう。夕食は冷蔵庫にあるから。塾が終わったら早く帰ってきなさいね」

美羽は返信した。

「わかった」

彼女はその短い文字を見つめ、少し考えてから、笑顔のスタンプを付け足した。

その方が、何事もないように見えるから。

彼女はスマホをコートのポケットに収め、スクールバッグのストラップをきゅっと引き締め、雨の中へと歩き出した。

学校から塾へ向かうには、まず狭い商店街を通り抜ける必要があった。十二月の夕暮れは日が落ちるのが早く、店の灯りが一盞、また一盞と灯っていく。揚げ物屋からはコ

ロッケの匂いが漂い、ドラッグストアの入り口には風邪薬の特売ポスターが貼られ、コンビニのガラス窓の向こうにはおでんを買い求める会社員の姿があった。

東京は大きい。

毎日、無数の人々が電車に押し込まれ、横断歩道を渡り、コンビニで列に並んで会計を済ませるほどに。

けれど時折、美羽は自分が排水溝に落ちた小さなボタンのように思えることがあった。世界は回り続け、誰も腰をかがめて自分を拾い上げてはくれない。

彼女は足早に歩いた。

塾は北千住駅の近くにある、古いビルの三階にあった。一階には歯科医院と印刷屋が入っており、印刷屋の入り口にはいつも「学生用レジュメ大量印刷割引」と書かれた赤い紙が貼られていた。

美羽が到着したとき、髪はすでに少し濡れていた。

彼女は傘を閉じ、入り口で雨水を振り落とした。隣にいる生徒の靴に水滴がかからないよう、細心の注意を払いながら。それから教室に入り、窓側から二列目の席に座った。

数学の先生はすでにホワイトボードに問題を書き始めていた。

「今日はまず小テストを行う。二十分間だ」

教室の中に、一斉に低い悲鳴が響いた。

美羽は筆箱からシャープペンシルを取り出した。指先がペン軸に触れたとき、初めて自分の指が少し冷たくなっていることに気づいた。

テスト用紙が回されてきた。

彼女は名前を書いた。

白石美羽。

その名前はとても端正に書かれていた。一画一画が、列に並ぶ小学生のように、決して間違えないよう緊張しているかのようだった。

第一問は二次方程式だった。

解ける。

第二問も解ける。

第三問も見覚えがあるはずだった。けれど、問題を見つめていると、脳裏に先ほどの校門の前での三本の傘が浮かんできた。

『今度機会があったら一緒に行こうね』

彼女だって分かっている。それが必ずしも拒絶ではないということを。もしかしたら彼女たちは本当に今日すでに約束をしていただけたかもしれないし、次回は本当に誘ってくれるかもしれない。自分が敏感すぎるだけかもしれない。

けれど、彼女の手は止まってしまった。

ペン先が紙の上に、小さな黒い点を打った。

もしあの時、自分が口を開いて「私も行きたい」と言っていたら、どうなっていただろう？

彼女たちは困っただろうか？

『でも、今日はちょっと都合が悪くて……』と苦笑いされただろうか。

そして空気が気まずくなり、彼女はますます「空気の読めない人」になってしまったかもしれない。

美羽は深く息を吸い、うつむいて書き続けた。

けれど、それ以降の問題は突然、すべて雨霧に包まれてしまったかのようだった。数字は滑り、公式はシャワーを浴びたばかりの小動物のように、頭の中でバラバラに逃げ回った。

「あと五分」

先生の声が教壇から聞こえた。

美羽の鼓動が速くなった。

彼女は第四問を消しゴムで消し、もう一度書き直した。第五問は空白のまま。第六問は半分しか書けていない。第七問にいたっては、何が書いてあるのかさえ理解できなかった。

二十分が終わり、先生がテスト用紙を回収した。

美羽は自分の空白の問題を見つめた。胃の中に濡れた紙クズを詰め込まれたような感覚だった。

十五分後、テスト用紙が返ってきた。

右上の隅に、赤ペンで書かれていた。

四十八点。

その数字はあまりにも鮮やかな赤で、まるで小さな傷口のようだった。

「白石」数学の先生が教壇の前で成績表をめくりながら言った。「最近、少し集中できていないんじゃないか？ この点数は君らしくないな」

教室の中が一瞬、静まり返った。

美羽はクラス全員の視線が自分に集まるのを感じた。実際には全員が見ているわけがないと分かってはいても。

「すみません」彼女はうつむいた。

先生はそれ以上責めることはせず、ただこう言った。「次は気をつけなさい。解けないんじゃない、上の空がひどすぎる」

「はい」

隣の席で、誰かが小さな声で言った。

「白石さんって、普段はすごく真面目じゃなかったっけ？」

その言葉に悪意はなかった。

けれど、美羽はそれを聞いた瞬間、耳のあたりが一気に熱くなるのを感じた。

真面目。

この二文字は、本来なら褒め言葉のはずだった。けれど今の彼女にとっては、サイズの合わない制服のように体にまとわりつき、息が詰まって逃げ出したくなるものだった。

もし「真面目」であることさえ役に立たないのだとしたら、自分には一体何が残されているのだろう？

授業が終わると、生徒たちは次々と片付けを始めた。問題が難しすぎたと文句を言う人、どうせ小テストだと割り切る人、肉まんを買いに行こうと誘い合う人。

美羽はテスト用紙を二つに折り、さらに二つに折って、クリアファイルの最も奥深くへと押し込んだ。

その点数を見たくなかった。

けれど点数はすでに紙に書かれているだけでなく、彼女のまぶたの内側に焼き付いてしまっているかのようだった。瞬きをするたびに、それが浮かび上がってくる。

塾の灯りはひどく白く、そこにいる全員の顔を少し疲れさせて見せた。

チャイムが鳴った後、美羽は階段の踊り場へと歩いていき、スマホを取り出した。画面が明るくなった瞬間、母親からの電話がかかってきた。

彼女は通話ボタンを押した。

「美羽？ 授業終わった？」

母親の声には、クリニックの背景の話し声が混ざっていた。誰かが受付で保険証の確認でもしているかのようだった。

「うん、今終わったところ」

「今日の塾はどうだった？」

美羽は手の中のクリアファイルを見つめた。

その一番奥で、四十八点のテスト用紙が水底に沈んだ魚のように横たわっている。

彼女の唇が動いた。

本当は、「よくなかった」と言いたかった。

今日の放課後、クラスメイトたちがクレープを食べに行くのに自分だけ誘われなかったこと。小テストを台無しにしてしまったこと。先生に名前を呼ばれたとき、まるで教室全体の中に置かれたガラスケースの中で展示されているような気分になったこと。今日は一人で帰りたくないということ。

それらをすべて言いたかった。

けれど、電話の向こうから母親が別の人に話しかける声が聞こえてきた。

「少々お待ちください。後ほど確認いたしますので」

母親が電話に戻ってきた。

「美羽？ 聞こえてる？」

「うん」 美羽はスマホをきゅっと握りしめた。「大丈夫だよ」

「ならよかった。夕食は冷蔵庫にあるから、帰ったらレンジで温めて食べなさいね。またパンだけで済ませちゃダメよ。お母さん、今日は少し遅くなるかもしれないから」

「わかった」

「気をつけて帰るのよ、雨が強くなってきたみたいだから」

「うん」

通話が切れた。

画面が暗くなる。

美羽は階段の踊り場に立ち、外の雨音を聞いていた。

彼女は突然、自分が先ほど一瞬だけ、ある扉の前に立っていたような気がした。手を伸ばしてそれを開きさえすれば、お母さんに「今日は本当によくないの」と伝えられたはずの扉。

けれど、彼女はそうしなかった。

ただもう一度、その扉を閉めてしまったのだ。

お母さんが忙しいから。ただの小テストにすぎないから。ただ誘われなかっただけだから。こんなことで泣くべきではないから。もしこんな小さなことさえ耐えられないのだとしたら、自分はきっと、とても面倒な人間になってしまうから。

美羽はスマホをポケットに戻し、ゆっくりと階段を降りていった。

塾の一階の外側には、ビルの入り口へと続く短い階段があった。普段ならそこは迎えに来る保護者を待つ生徒たちでごった返しているのだが、今日は雨が強くなったせいか、人々はすぐに散って行ってしまった。

彼女は傘を開こうとした。

けれど、傘の骨が途中で引っかかってしまった。

美羽は呆然とし、もう一度ボタンを押した。

透明な傘は半分までしか開かず、まるで噛みちぎられたクラゲのようになっていた。彼女はその場にしゃがみ込み、引っかかった骨を押し戻そうとした。雨水が彼女のうなじに落ち、その冷たさに体をすくませた。

隣を数人の生徒が通り過ぎ、親の車へと駆け込んでいく。

ドアが閉まる。エンジンの音が遠ざかる。

階段の口には、すぐに彼女一人だけが取り残された。

美羽は力を込めて傘の骨を引っ張った。

その拍子に、スクールバッグの脇からクリアファイルが滑り落ちた。

中に入っていたテスト用紙が、地面へとこぼれ落ちる。

彼女は手を伸ばして拾おうとしたが、一陣の風が吹き抜け、テスト用紙はひっくり返り、そのまま階段の脇の大きな水たまりの中へと滑り込んでいった。

赤ペンで書かれた「四十八」の数字が、雨水の中でのびていく。まるで踏み潰されたイチゴ飴のようだった。

美羽はそのテスト用紙を見つめたまま、突然、動けなくなってしまった。

雨が彼女の髪に落ち、前髪を伝ってまつ毛へと滴る。彼女は階段の口でしゃがみ込み、片手に半分壊れた傘を持ち、もう片方の手でクリアファイルを押さえたまま、肩を少しずつ丸めていった。

ただ点数が悪かっただけ。ただ誘われなかっただけ。お母さんが今日、少し忙しいだけ。雨が激しくなっただけ。傘が壊れただけ。テスト用紙が濡れただけ。

一つ一つは、どれもとても小さなことだった。

泣くための理由にしてはいけないほど、小さなこと。

けれど、それらの小さなものが積み重なったとき、それは突如として、彼女には越えられない巨大な山へと姿を変えた。

涙がこぼれ落ちたとき、美羽は自分自身に驚いた。

彼女は慌ててうつむき、袖口でそれを拭い去った。

けれど、拭えば拭うほど、涙は溢れてきた。

声を上げて泣く勇氣はなく、ただ唇を噛みしめるしかなかった。肩が小刻みに震える。まるで雨に打たれながらも、自分が野良犬ではないと必死に強がっている小動物のようだった。

「もし、悲しむことさえ誰かの迷惑になるのだとしたら……」

彼女は心の中で思った。

「私には、悲しむ資格さえ、ないのかな？」

その時だった。一人の足音が、彼女の目の前で止まった。

美羽はすぐに顔を伏せ、顔を隠そうとした。

視界に入ったのは、一足のスニーカーだった。

白いアッパーの、つま先が雨水で少し泥に汚れている。

続いて、一本のホットミルクティーが、彼女の隣の段にそっと置かれた。

缶が落ちるとき、とても軽い音が響いた。

カツン。

まるで雨の夜に、誰かがガラスを軽く叩いたかのような音。

「これ、すごく甘いんだ」

少年の声が、上方から降ってきた。

「ちょっと引くくらい甘い。だから、今日みたいな最悪の天気にはぴったりだよ」

美羽は硬直した。

彼女はゆっくりと顔を上げた。

そこに立っていたのは、濃い色のジャケットを着た高校生だった。透明な傘が光の大部分を遮り、雨水がその表面を滑り落ちていく。彼の髪は雨で少し濡れていたが、瞳はとても澄んでいて、笑うと、人を緊張させない絶妙な距離感があった。

美羽は慌ててうつむいた。

「私、私は大丈夫です」

少年は彼女を見つめ、それから水たまりの中のテスト用紙に視線を落とした。

彼は笑わなかった。

過剰に同情するような表情も見せなかった。

彼はただ、彼女と少し距離を置いたままその場にしゃがみ込み、その濡れたテスト用紙を拾い上げると、水をパツパと振り払った。

「大丈夫そうには見えないけど」彼は言った。「でも、もし君が強がりたいて言うなら、僕はそれに合わせるよ」

美羽の指先が強張った。

どう答えていいか分からなかった。

普通、泣いている人に出会ったら、人は『泣かないで』と言う。先生なら『次は頑張ろう』と言う。お母さんなら『何があったの』と言う。クラスメイトなら、気まずそうにティッシュを差し出すかもしれない。

けれどこの人は、もし強がりたいたならそれに合わせる、と言ったのだ。

とても不思議だった。そして、とても怖かった。

なぜなら美羽は突然、自分が「見つけられた」ような気がしたからだ。

泣いているところを見られたわけでも、点数の悪さを見られたわけでもない。いつも必死に「大丈夫」という仮面を顔に貼り付けている、自分そのものを見透かされたような気がした。

彼女は鼻をすすった。

「すみません」

「なんで謝るの？」

「だって.....こんなところを見せちゃったから」

少年は少し眉を上げた。

「雨の日に階段の口で泣かれるのは、確かにちょっと通りにくい。でも、ここは僕の階段じゃないしね」

美羽は呆然とした。

少年はテスト用紙を彼女に差し出した。

紙はすでにシワだらけで、赤い点数は怪獣に舐められたかのようにひどくにじんでいた。

「それに、たかが四十八点だし」

美羽はテスト用紙を受け取り、顔が一気に熱くなった。

「み、見ないでください！」

「ごめん、もう見ちゃった」

「じゃあ、口に出さないで.....」

「わかった」少年は実にあっさりと頷いた。「僕は何も見てない」

美羽は彼を見つめた。

あまりにも自然に言うものだから、彼女は一瞬、彼がただあしらっているだけなのか、それとも本当に自分の強がりに合わせてくれているのか分からなくなってしまった。

数秒の後、彼女はうつむき、思わず吹き出しそうになった。

少年はホットミルクティーを彼女の方へと少し押し出した。

「飲みなよ。変な人がくれた変な飲み物じゃないから。さっきそこの自販機で買ったばかりで、まだ開けてない」

彼は隣の自動販売機を指さした。

美羽は彼が指した方向を見た。自販機の灯りが雨の中で輝いており、まるで健気に営業している小さな宇宙のようだった。

彼女は少し躊躇した。

「結構です、いただくわけにはいきません」

「じゃあ、僕はもう行くから、その後で拾えばいい。それなら受け取ったんじゃないくて、拾得物ってことで」

「それ、もっと怪しいですね」

少年はくすつと笑った。

彼の笑い声は低く、誰かを嘲笑うような響きは一切なかった。

美羽はそのミルクティーを見つめた。

白い缶にはキャラメル色の模様が印刷されていた。熱がアルミ缶を通して伝わり、周囲の雨水をいっそう冷たく感じさせた。

彼女は手を伸ばし、それを手に取った。

手のひらが一瞬にして温もりに包まれる。

「ありがとうございます」

「どういたしまして」

少年は立ち上がり、彼女の引っかかっていた傘を受け取った。

「傘、ちょっと見せて？」

美羽は慌てて傘を彼に手渡した。

彼は自分の透明な傘を少し彼女の方へと傾け、彼女がもう雨に濡れないようにした。二人きりの距離は決して近すぎなかったけれど、傘の表面が雨音を遮ると、世界は突然、狭くなった。

階段の口、自動販売機、ホットミルクティー、そしてうつむいて傘を修理している見知らぬ少年の横顔。世界にはそれしか残されていないかのように思えた。

「こういう傘は壊れやすいんだよね」彼は骨組みを見つめながら言った。「コンビニの三百円のやつは、命がもやしより短いから」

美羽はミルクティーを抱え、小さな声で言った。

「でも、朝はちゃんとしてたんです」

「いろんなものが、朝はちゃんとしてても、夜にはどうなってるか分からないよ」

それは何気なく口にされた言葉のようだった。

けれどなぜだか、美羽はまた鼻の奥がツンとするのを感じた。

少年は傘の骨を元の位置に戻し、開こうと試みた。透明な傘はあまり健康的ではない不快な音を立てたけれど、どうにか開いた。

「なんとか使えるよ」彼は言った。「でも、今日家に帰ったら、二度とこの傘を信用しないほうがいい」

「はい」

彼は傘を彼女に返した。

美羽はそれを受け取り、蚊の鳴くような声で言った。

「ありがとうございました」

「君、この塾の生徒？」

「はい」

「中学生？」

美羽は頷いた。

「中学二年生です」

「そうなんだ」少年は塾の看板を見上げた。「僕も昔、この近くの塾に通ってたことがある。ここの階段は、人生を疑うのにちょうどいい場所だよ」

美羽は笑うべきかどうかわからなかった。

少年は続けた。

「一回テストの点数が悪かったくらいで、どうってことないよ。本当に厄介なのは、誰もが『真面目な人間は失敗しちゃいけない』って思い込んでることだ」

美羽がミルクティーを握る指先が、ぴくりと固まった。

その言葉は小さな鍵のようだった。彼女の胸の奥にある、自分自身さえ存在を知らなかった鍵穴に、ぴったりと差し込まれたかのような。

『誰もが、真面目な人間は失敗しちゃいけないと思っている』

先生もそうだった。クラスメイトもそうだった。そして、彼女自身もそうだった。

自分が真面目で、おとなしく、静かで、迷惑をかけずにいさえすれば、どこかに自分の居場所を確保できるのだと、彼女はずっと思い込んでいた。

けれど今日、彼女はその居場所さえも、一枚の四十八点のテスト用紙によって揺るがされてしまうのだと知った。

美羽は彼を見上げた。

「あなたも、そう思うんですか？」

少年は階段の脇の壁に寄りかかり、傘の柄を肩にのせた。

「よく思うよ」彼は言った。「だから、今の僕はこんなにクズ（廃人）みたいに見えるんだ」

「そんな風には見えません……」

美羽は言いかけて言葉を止めた。

「どんな風に？」

「クズみたいには、見えません」

少年は少し瞬きをした。その言葉がどこか新鮮であるかのように。

「君って結構いい人だね。見ず知らずの他人のメンツを立ててくれるなんて」

「メンツを立ててるんじゃないくて、ただ私は……」

美羽はそれ以上言えなかった。

彼女は本当は、彼がとても物怖じせず、余裕があるように見えると言いたかったのだ。たとえテストの点数が悪くても、嫌われても、傘を忘れても、自分自身を見失うことのない、そんな人のように見える、と。

けれど、そんな風に言うのはあまりにも不自然だった。

少年はそれ以上追及しなかった。

彼はポケットからスマホを取り出し、時間を確認した。

「もう遅いね。家族の人が心配してるんじゃない？」

「はい」

美羽は立ち上がり、クリアファイルをバッグに戻した。濡れたテスト用紙は一番奥に挟み込まれた。もう元通りにはならないけれど。

彼女は本当は、彼がとても物怖じせず、余裕があるように見えると言いたかったのだ。たとえテストの点数が悪くても、嫌われても、傘を忘れても、自分自身を見失うことのない、そんな人のように見える、と。

けれど、そんな風に言うのはあまりにも不自然だった。

少年はそれ以上追及しなかった。

彼はポケットからスマホを取り出し、時間を確認した。

「もう遅いね。家族の人が心配してるんじゃない？」

「はい」

美羽は立ち上がり、クリアファイルをバッグに戻した。濡れたテスト用紙は一番奥に挟み込まれた。もう元通りにはならないけれど。

彼女はそのミルクティーの缶を抱え、少年へと一礼した。

「今日は、本当にありがとうございました」

「そんなに畏まらなくていいよ。授賞式じゃないんだから」

美羽の顔がまた熱くなった。

彼女が歩き出そうとしたその時、少年の声が聞こえた。

「君、名前は？」

彼女は足を止めた。

二人の間に、雨音が降り注ぐ。

普通に考えれば、見知らぬ人に名前を教えるべきではない。お母さんからは、知らない人に個人情報教えてはいけないと言われていた。学校の先生からも、路上で話しかけてくる人には注意しなさいと教えられていた。美羽はそれを知っていた。

けれど、彼は先ほどから彼女に近づきすぎることもなく、触れることもなく、家がどこにあるかを尋ねることも、連絡先を求めることもしていなかった。

彼はただ、名前を聞いたただけだった。

それに、ここで名前を言わなければ、少し失礼な気もした。

美羽は少し躊躇い、小さな声で答えた。

「白石.....美羽です」

「美羽」

少年はその名前を一度繰り返した。

彼の口から自分の名前が発せられたとき、それは普段聞くものとは少し違って聞こえた。先生がロールコール（点呼）の時に呼ぶ「白石」でもなく、お母さんがご飯を急かす時の「美羽」でもない、何かとても軽い響きを帯びていた。

「いい名前だね」彼は言った。「すごく軽いものみたいだ」

美羽はうつむいた。

「そんなことないです.....普通の名前ですから」

「普通でも、いい名前はあるよ」

彼女はどう返事をしていいか分からなかった。

透明な傘に雨が当たり、パチパチと音を立てている。

少年はふと思い出したかのように、親指で自分を指した。

「佐伯悠斗」

美羽は彼を見つめた。

「佐伯.....悠斗さん」

「覚えなくていいよ」彼は少し笑った。「どうせ僕は大事な人間じゃないし」

その瞬間、美羽の心の中に、突然焦るような気持ちが湧き上がってきた。

まるで、自分が本当に覚えていなければ、目の前のこの人が雨に洗い流されて消えていってしまうかのような、そんな焦燥感。

「そんなことないです」彼女は慌てて言った。「私、覚えています」

佐伯悠斗は彼女を見つめ、その笑みをもう少しだけ深くした。

「じゃあ、よろしく頼むよ」

美羽はうなずいた。

「はい」

彼は彼女のLINEを聞かなかった。どここの学校かとも尋ねなかった。またね、とも言わなかった。

ただ傘を差して、別の方向へと歩き去っていった。

美羽は階段の口に立ち、彼の背中が雨と街灯の中に少しずつ溶け込んでいくのを見つめていた。

完全に姿が見えなくなって初めて、彼女は手元にあるホットミルクティーに目を落とした。



缶はまだ温かった。

彼女はプルタブを開け、一口飲んだ。

本当に甘かった。少し引くくらいに。

あまりの甘さに彼女は眉をひそめたが、それでも耐えきれずに、もう一口飲んでしまった。

帰りの電車の中は、それほど混んでいなかった。

美羽はドアの近くの席に座り、スクールバッグを膝の上に抱え込んだ。車窓には彼女の顔が映っていた。前髪は束になって濡れ、目は少し赤く、ひどくみすぼらしい姿だった。

けれど彼女は、普段のように慌ててうつむき、自分の反射から目を逸らすことはしなかった。

彼女は窓の外を流れていく東京の夜景を眺めていた。

看板、街灯、コンビニ、自転車を漕ぐ人、濡れた横断歩道。それらの景色はいつもと変わらなかった。

違っていたのは、彼女の手の中に一つの空き缶があることだった。

ミルクティーは彼女がすべて飲み干してしまっていた。アルミ缶はもう熱くはなく、ほんのわずかな余熱を残すのみだった。美羽は両手でそれを包み込むように持っていた。まるで、誰にも見られてはいけない小さな秘密を大切に抱えているかのように。

佐伯悠斗。

彼女は心の中で、その名前を一度唱えてみた。

佐伯悠斗。

二度目に唱えたとき、彼女は胸の奥に詰まっていた濡れた綿が、ほんの少しだけ軽くなったような気がした。

家に帰ると、リビングの灯りはついてしたが、母親はまだ戻っていなかった。

食卓にはメモ用紙が貼られていた。

「カレーが冷蔵庫にあるから、温めて食べなさい。雨だから風邪をひかないようにね」

文字は少し急いで書かれたようで、最後の一画が長く伸びていた。

美羽は靴を脱ぎ、台所へと歩いていった。

冷蔵庫の中のカレーはガラスの保存容器に入れられており、その隣には小さく切られたリンゴの容器もあった。彼女はカレーを電子レンジに入れ、加熱ボタンを押した。

電子レンジが低い音を立てて回り始める。

彼女は台所に立ち、不意に家の中がとても静かであることに気づいた。

温もりがないわけではない。ただ、静かなのだ。

彼女は電話口での母親の問いかけを思い出した。『今日の塾はどうだった？』

彼女は答えた。『大丈夫だよ』

もしあの時、自分が「よくなかった」と言っていたら、どうなっていたらう？

お母さんは慌てて迎えに来てくれたらうか？ 彼女の頭を撫でてくれたらうか？

『一回くらい点数が悪くても大丈夫よ』と言ってくれたらうか。

美羽にはわからなかった。そして、彼女にはあの電話をかけ直す術もなかった。

電子レンジがチンと音を立てた。

彼女はカレーを食べ終え、食器を洗い、お風呂に入り、髪を乾かし、最後に自分の部屋へと戻った。

部屋は狭く、勉強机は窓際にあり、壁には学校の年間行事予定表が貼られていた。机の上には教科書、筆箱、単語カード、そして白いデスクライトが置かれていた。

美羽はバッグから濡れたテスト用紙を取り出した。

紙はすでにシワだらけで、赤い点数もにじんでしまっていた。

彼女は最初、それをゴミ箱に捨てようとした。

手を伸ばしたところで、動きが止まった。

彼女は結局、そのテスト用紙を引き出しの一番下へと挟み込んだ。

それから、彼女は空になったホットミルクティーの缶を見つめた。

常識的に考えれば、捨てるべきものだった。ただの空き缶にすぎない。取っておくなんて奇妙だ。もしお母さんに見つかったら、なぜ部屋にゴミを置いているのかと聞かれるかもしれない。

けれど美羽はそれを、勉強机の隅、壁に近い場所へとそっと置いた。

アルミ缶はそこに佇み、白いボディがデスクライトの光をわずかに反射させていた。まるで、何かの証拠であるかのように。

今夜が、ただ四十八点の点数や、壊れた傘、濡れたテスト用紙、そして口に出せなかったSOSだけで終わったわけではないという証拠。

自分が階段の口でしゃがみ込んでいるのを見つけ、泣くとも言わず、変だとも言わず、ただ引くくらいに甘いホットミルクティーを差し出してくれた人が、確かにいたのだという証拠。

美羽はデスクライトを消し、ベッドに横たわった。

窓の外では、まだ雨が降り続いていた。

細やかな雨音がガラスを叩く。まるで夜の中に、無数の小さな指先がピアノを奏でているかのようだった。

彼女は布団を鼻の先まで引き上げ、目を閉じた。

本当なら、あのテスト用紙のことを考えるべきだった。本当なら、明日どうやって先生の前に顔を出せばいいかを考えるべきだった。本当なら、自分がまた失敗してしまったのだと落ち込むべきだった。

けれど、彼女の脳裏に何度も何度も浮かび上がってきたのは、雨の中に佇む佐伯悠斗の姿だった。

そして、あの言葉。

『大丈夫そうには見えないけど。でも、もし君が強がりたいて言うなら、僕はそれに合わせるよ』

美羽は布団の中で、とても、とても静かに、小さく微笑んだ。

その夜、白石美羽はまだ知らなかった。ある種の罨というものは、決して暗闇の穴などではないのだということ。

それは、雨の中にちょうどよく灯された一盞の明かりのようであり、あるいは、少し引きずるほどに甘い、一本のホットミルクティーのような姿をしているのだということ。

— 第一章 終 —

第二章 彼は言った、君だけが僕を分かってくれると

白石美羽（しらいし みう）が目を覚ましたとき、雨はすでに上がっていた。

窓の外空はまだ薄暗く、何度も洗い古したセーターのように、退屈なほど色褪せていた。遠くの電線には数羽の雀が止まり、羽を膨らませている。その姿は、寝不足の小さな団子が並んでいるようだった。

彼女はベッドに横たわったまま、天井を数秒間じっと見つめた。それから、昨夜の出来事がゆっくりと脳裏に蘇ってきた。

塾の階段口。壊れた傘。濡れたテスト用紙。そして、あの甘すぎるほどのホットミルクティー。

美羽は跳ね起きるようにして座った。机の隅には、あの空き缶がまだ置いてあった。白い缶が電気スタンドの脇に静かに佇んでいる。それはまるで、自分の部屋にあってはならない小さな「証拠品」のようだった。彼女がそれを見つめていると、なぜか頬が熱くなってきた。

ただの空き缶だ。昨日、見知らぬ人がくれただけの飲み物。いや、もう完全に見知らぬ人というわけではない。

佐伯悠斗（さえき ゆうと）。

美羽は心の中でその名前を呟き、すぐに布団を少し引き上げた。そうすれば、自分の表情を隠せるかのように。自分が少しおかしくなっている気がした。昨日初めて会ったばかりなのに。相手がどんな人かも知らないのに。お母さんから、道で声をかけてくる人を簡単に信じてはいけないと言われていたのに。

でも、あの人は怪しいことなんて何もしていなかった。近づきすぎることもなかった。しつこく問い詰めることもなかった。テストの点数が悪かったことを笑うわけでもなく、「泣くな」と強いることもしなかった。

彼はただ、温かいミルクティーを差し出して、こう言ったのだ。「平気そうには見えない。でも、平気な振りをしたいなら、付き合うよ」

その言葉は、完全に溶けきっていない砂糖のように、昨夜からずっと彼女の心に引っかかっていた。甘みはかすかだが、確かにそこに残り続けている。

「美羽、起きなさい」ドアの外から母親の声がした。美羽はびくっとして、反射的に机の上の空き缶を掴んだ。ドアがトントンと二回叩かれる。「朝ご飯、もうすぐできるわよ。今日はギリギリにならないように準備しなさい」「う、うん、すぐ行く！」美羽は慌てて引き出しを開け、その一番奥に空き缶を押し込んだ。缶が引き出しの底に当たり、軽い音を立てた。

彼女はすぐに動きを止めた。ドアの外からは何の気配もしない。母親はすでに台所へ戻ったようだった。美羽はホッと胸を撫で下ろしながらも、自分の反応が酷く滑稽に思えて仕方がなかった。

どうして隠す必要があるのだろうか？ もしお母さんに聞かれたら、昨日自分で買ったと言えばいい。あるいは友達にもらったとか、いっそ捨てるのを忘れていたと言えば済む話だ。それなのに、やっぱり隠してしまった。他人に触れられてはならない、小さな小さな火種を隠すように。

制服に着替えてリビングへ行くと、母親が目玉焼きをお皿に盛り付けているところだった。白石由香（しらいし ゆか）はクリニックの白衣を羽織り、髪をヘアクリップで無造作に留めていた。目の下にはうっすらと疲労の色が浮かんでいる。食卓には味噌汁、白ご飯、目玉焼き、そして小さな皿に盛られたたくあんが並んでいた。「昨日は雨、凄かったでしょう？」母親が言った。「傘、まだ使えそう？」美羽は椅子を引いて座った。「ちょっと壊れちゃった」「じゃあ、今日の放学（学校帰り）にコンビニで新しいのを買いなさい。三百円のビニール傘は本当に壊れやすいから」美羽は目玉焼きを箸で挟んだ。本当は、昨日ある人が家まで帰れるように直してくれたのだと言いそうになった。しかし、言葉が喉まで出かかったところで、また止まってしまった。彼女はうつむき、目玉焼きを一口かじった。「うん」

母親がちらりと彼女を見た。「昨日の塾、本当に大丈夫だった？ 帰ってきたとき、なんだか疲れているみたいだったけど」美羽の箸がピタリと止まった。いつもの彼女なら、きっとすぐに「大丈夫」と答えていただろう。けれどどうしてか、今日は突然、佐伯悠斗が自分を見つめていたときの眼差しを思い出した。

——平気そうには見えない。

「ちょっと、小テストの出来が悪くて」彼女は小さな声で言った。母親は一瞬呆気にとられたが、すぐに微笑んだ。「小テストくらいじゃない。次はまた頑張って取り返せばいいわ。自分を追い詰めすぎちゃダメよ」それはとてもありふれた慰めだった。そして、昨日の夜、彼女が本当に求めていた言葉でもあった。それなのに、今それを耳にしても、心は想像していたほど軽くはならなかった。おそらく、最も無様（ぶざま）な姿を、すでに別の人に見せてしまったからだろう。

母親が手を伸ばし、彼女の頭を優しく撫でた。「何かあったらお母さんに言いなさいね。一人で抱え込んじゃダメよ」美羽は目を伏せた。「うん」

お母さんが自分を愛してくれていることは分かっている。お父さんもそうだ。我が家は冷え切った場所ではない。食卓にはいつも温かいご飯があり、冷蔵庫には切ったフルーツが入っていて、靴箱の横にはいつも予備の傘が置いてある。けれど、温かい場所であればあるほど、口にできない言葉というものがある。それを口にしてしまえば、その温もりを汚してしまうような気がするからだ。

◇

学校に着くと、一日はいつもと全く同じように過ぎていった。一限目は国語、二限目は理科、三限目は英語。先生のチョークが黒板に白い粉を散らし、窓の外の校庭には雨上がりの水たまりが残っていた。体育の先生が生徒たちを引き連れて、水たまりを避けながらランニングをしている。美羽は自分の席に座り、ノートを綺麗に取っていた。前を向いて授業を聞き、下を向いて要点を書き写す。先生に指されれば、答えることもできた。「白石、この問題をやってみろ」彼女は立ち上がった。「答えは三番の選択肢です。前の記述と後ろの結論が一致していないからです」先生が頷く。「よし、調子に戻ってきたな」教室のどこかで軽い拍手が起こり、教科書をめくる音がいつもより少し大きく響いた。美羽は席に戻るとき、模範的な微笑みを浮かべた。

調子に戻ってきた。それはとても良い言葉に聞こえる。けれど彼女は知っていた。自分の調子は少しも戻っていない。ただ、あの「何でもない白石美羽」を再び身にまとっただけなのだ。

昼休み、森下（もりした）さんともう二人の女子が、机を囲んでスマホを覗き込んでいた。「見て、これめちゃくちゃ綺麗に撮れてない？」「いちごクレープ、本当に可愛い」「でも、バナナチョコの方が美味しいよね」森下さんは、美羽が視線を向けたことに気づき、スマホを彼女の方に傾けた。「白石さん、見て。これ、昨日行ったお店だよ」画面には、クレープを手にした三人の女子の写真が映っていた。背景は北千住駅の近くの看板で、いちごのホイップクリームがピンク色の小さな山のようにこんもりと盛られていた。美羽は微笑んだ。「可愛いね」「でしょ？ 今度は本当に一緒に行こうよ。塾がそんなに忙しなくてもいいけど」「うん」美羽は頷いた。彼女は「今度」がいつなのかは聞かなかった。自分も本当に行きたい、とも言わなかった。「今度」という言葉は、時として綺麗な包装紙に過ぎず、その中に本物のプレゼントが入っているとは限らないからだ。

昼休みが終わる前、彼女は手洗いに立って手を洗った。鏡に映る自分は、いつも通りだった。黒髪のセミロング、整った制服。特別可愛くもなく、特別不細工でもない。人混みの中に混じれば、すぐに忘れられてしまうような顔。美羽はペーパータオルで手を拭きながら、ふと、昨日佐伯悠斗が言った言葉を思い出した。

——いい名前だね。とても軽いものみたいだ。

彼女は鏡の中の自分を見つめた。白石美羽。自分の名前を特別だと思ったことは一度もない。お父さんとお母さんが「美羽」と名付けたのは、羽のように軽やかに、自由に羽ばたいてほしいと願ったからだ。けれど美羽自身はいつも、自分は水に濡れた紙屑のようだと思っていた。軽くなることもできず、飛び立つこともできない。

◇

放課後、美羽はいつもより十分早く塾の近くに到着した。道中、彼女はずっと自分に言い聞かせていた。ただ遅刻したくないだけだと。昨日は雨だったから、今日は路面が滑

りやすいかもしれない。少し早めに行くのは当然のことだ。けれど、あの古いビルに近づくと、彼女の視線は無意識のうちに一階の階段口へと向いていた。

そこに佐伯悠斗はいなかった。

自動販売機は冷たい白い光を放ち、缶コーヒーやホットミルクティー、コーンスープがガラスの向こうに整然と並んでいた。昨日、彼が立っていた場所はぽっかりと空いている。美羽はビルの入り口の前で立ち止まり、カバンの肩紐を整える振りをした。誰もいない。彼女はスマホの時計を確認した。授業開始まであと七分。

「別に、あの人を待ってるわけじゃない」 彼女は心の中で自分に言い訳をした。「ただ、もし偶然会えたら、昨日の実（お礼）が言えるから」 ありがとうと言えれば、それでいい。本当に。ただそれだけのこと。

彼女はビルに入り、三階へ上がった。その日の塾には小テストがなかった。先生は丸一コマを関数の解説に費やし、黒板は数式と座標の線で埋め尽くされた。美羽は必死に集中しようとしたが、ノートの余白に、どうしても「佐伯」という文字の一画目を無意識に書き込んでしまう。彼女はすぐにその一画を塗りつぶした。心臓が、まるで悪いことをしている時のように激しく高鳴っていた。

授業が終わり、生徒たちがカバンを片付け始めると、階段室は再び騒がしくなった。宿題の多さに文句を言う者、コンビニの新作プリンについて話す者、電車で遅れまいと急ぐ者。美羽はわざと、教科書をゆっくりと一冊ずつカバンに仕舞い込んだ。みんなと階段で混み合うのが嫌なだけで、と自分に言い聞かせながら。教室からほとんど人がいなくなってから、ようやく彼女はカバンを背負い、階段を下りた。

一階の明かりは昨夜よりも少し明るく感じられた。雨が止み、ビルの外の路面にはまばらな街灯の反射が残っているだけだったからだ。彼女が自動販売機の横を通りかかったその時、声が聞こえた。

「白石美羽。本当に塾に来てたんだね」



美羽の足が止まった。佐伯悠斗が自販機の前に立ち、ブラックコーヒーの缶を手にして
いた。今日の彼は傘を持っておらず、濃いグレーのジャケットを着て、首元には黒いマ
フラーを緩く巻いていた。髪は昨夜よりも乾いていて、いっそう普通の高校生らしく見

えた。ただ、その瞳だけは、やはり何もかもを見透かしているかのような、かすかな悪戯っぽい笑みを湛えていた。

美羽の心臓が一拍跳ねた。彼が、名前を覚えてくれていた。「昨日階段口で泣いていた女子」ではなく、「白石美羽」として。

「.....ここの生徒ですから、当然です」彼女は小さな声で言った。「そりゃそうだ」悠斗は頷いた。「じゃなきゃ、昨日のあの場所で、あれほど塾に帰属意識があるような泣き方をされてたら、ただの通りすがりには見えないしね」美羽は一瞬で顔を真っ赤にした。「その話は、もうしないでください」「わかった」悠斗はブラックコーヒーの缶を掲げ、まるであまり真面目ではない宣誓をするかのような仕草をした。「昨日の階段口事件はこれにて封印」「本当ですか?」「うん。君がまた同じ場所で泣かない限りはね。そしたら新しいファイルを開かなきゃいけなくなる」「もう泣きません」「そう願うよ。あの階段も、これ以上残業したくなさそうだし」

美羽は思わずくすっと笑ってしまった。笑った瞬間、自分自身でも驚いた。昨日からずっと、胸の奥に湿った綿が詰まっているようだったのに。今のほんの一言で、何かがすうっと吹き抜けたような気がした。悠斗は彼女の笑顔を見ても、特に大袈裟に反応することはしなかった。ただ自販機の方を向き直る。「今日のテストは、少しはマシだった?」「今日はテスト、ありませんでした」「それは塾にしては珍しく、感謝すべき日だね」彼は自販機のボタンを押した。ガタゴトと重苦しい駆動音がして、ホットココアの缶が落ちてきた。悠斗はそれを拾い上げ、彼女に差し出した。美羽はすぐに首を振った。「ダメです。昨日もいただいたのに、今日ももらうわけにはいきません」「金の延べ棒じゃあるまいし」「でも.....」「じゃあ、これは君にあげるものじゃない」悠斗はホットココアを自販機の脇の平らなスペースに置いた。「僕が買いすぎただけ。誰が持っていても、それは持っていった人の勝手だ」美羽はそのぽつんと置かれたホットココアを見つめた。「買いすぎたって、一缶しか買ってないじゃないですか」悠斗は瞬きをした。「ツッコミが上手くなったね。いいぞ、進歩だ」「元からできます」「そう? 昨日は壊れた傘に謝りそうな勢いだったけど」美羽は口をすぼめた。確かに、あの傘に謝りそうになっていた。だから何も言い返せない。

悠斗は無理に受け取らせようとはしなかった。彼は壁に背を預け、自分のブラックコーヒーを開けて一口飲むと、すぐに顔をしかめた。美羽はそれを見て言った。「美味しくないんですか?」「苦い」「じゃあ、どうして買ったんですか?」「さっきコンビニの前で、小学生がブラックコーヒーを飲んでるのを見かけてさ。負けてられないなと思って」「何ですか、その変な対抗心」「男っていうのはね、時々どうでもいいところで負けず嫌いになる生き物なんだよ」彼が大真面目に言うものだから、美羽はついに声を立てて笑ってしまった。小さな笑い声だった。鉛筆の芯がかすかに折れるような、それでも確かに笑っていた。悠斗は彼女をちらりと見て、口元をわずかに綻ばせた。「君、笑うと中学生みたいだね」美羽はハッとした。「どういう意味ですか?」「普段はさ、確定申告の準備でもしてる中学生みたいに見えるから」確定申告が何なのかはよく分からなかったが、とても堅苦しいことのようにだ。「そこまで酷くないですよ」「ちょっとあるよ」「ちょっとって、どれくらいですか?」「だいたい六十四パーセントくらい」「どうしてそんなに具体的なんですか.....」

二人は自販機の横に立ち、他愛もない話を続けた。けれど美羽は、この意味のない会話が、今日学校で交わしたどんな「正しい会話」よりも安心できるように感じていた。彼女は結局、そのホットココアを手にとった。「.....ちゃんとお返しします」「いらないよ」「返します」美羽は財布から小銭を取り出した。「昨日のミルクティーと、今日のココア。ちゃんと払います」悠斗はそれを受け取ろうとはしなかった。「じゃあ、今度テストでいい点取ったら、その時返して」「今度?」「うん。自分が納得できる点数を取ったら、その時に一缶奢ってよ」

美羽は小銭を握ったまま、手を空中で止めた。今度。また「今度」だ。けれど今回のこの言葉は、ガラスケースの向こうの手の届かないスイーツのように感じられなかった。それはまるで、本当に自分の手に手渡された切符のようだった。「もし.....ずっと良い点数が取れなかったら?」彼女は小さな声で尋ねた。悠斗は彼女を見つめた。「その時は、ずっと待つしかないね」

美羽の指先がかすかに痺れるような感覚を覚えた。どうしてその言葉が、胸の奥をこれほど熱くさせるのか分からなかった。ただの冗談なのに。彼はとても軽い調子で言ったのに。けれど「ずっと待つ」というその四文字は、彼女の人生においてあまりにも聞き慣れないものだった。普段、みんな忙しい。お母さんも、お父さんも、先生も忙しい。友達にはそれぞれのグループがあり、世界は彼女がついていけないからといって止まってはくれない。なのに彼は、ずっと待つことができると言ったのだ。

「どうしたの?」悠斗が聞いた。「なんでもないです」美羽はうつむき、小銭を財布に戻した。「じゃあ.....頑張って良い点数を取ります」「よろしい。それが正しいお金の使い方というものだ」

◇

二人がビルを出ると、外の雨は完全に上がっていた。路面は濡れて光り、街灯がアスファルトに反射しては、歩行者の足元で碎けていた。北千住駅の方からは電車がホームに入る音が聞こえてくる。それはまるで、都市の奥深くに潜む巨大な鉄の獣が息を吐き出しているかのようなだった。

美羽は本来、まっすぐ駅へ向かうべきだった。けれど悠斗が、自分も同じ方向へ行くと言うので、二人は並んで少しの距離を歩くことになった。互いの間には、近すぎず、かといって他人ほど遠くもない、ちょうどいい距離が保たれていた。美羽は両手でホットココアを包み込むように持っていた。缶はとても温かく、手袋よりもずっと頼りになった。

悠斗は前を見つめたまま、ふと尋ねた。「君、そんなに点数が気になる?」美羽は少し考えた。「.....そうだと思います」「どうして?」「だって.....」彼女は自分の靴の先を見つめた。靴の先が小さな水たまりを踏むと、水面が揺れ、映り込んでいた街灯が金の粉のように散った。「勉強を頑張らなかったら、私には何も取り柄がなくなっちゃう気がする」口にしてすぐ、彼女は後悔した。あまりにも陰気な言葉だった。愚痴を言っているようにしか聞こえない。「冗談です」と付け加えようとしたが、悠斗は笑わなかった。

彼はしばらく沈黙した。美羽が、何か悪いことを言ってしまったのではないかと不安になり始めるほど、長い沈黙だった。それから、彼は言った。「僕も昔、そうだったよ」美羽は顔を上げた。悠斗は彼女を見ることはせず、ただ前方の信号を見つめていた。「後になって気づいたんだ。どんなに上手くやっても、大人は結局、足りない部分しか見ないんだってね」彼の声はとても静かだった。さっき冗談を言っていた時の、あの気怠げなトーンとは違っていた。「九十点を取れば、どうして九十五点じゃないんだと言われる。合格すれば、どうしてもっと上の学校じゃないんだと言われる。彼らの言う通りにすれば主体性がないと言われ、言う通りにしなければ分らず屋だと言われる」彼は小さく笑った。その笑いは短く、乾いていた。「まあいいや、こんな話、陰気臭いね」

美羽はすぐに首を振った。「そんなことはありません」悠斗は足を止め、彼女の方を向いた。「君は、僕を笑わない？」「笑いません」あまりに早く答えたので、自分でも驚いた。けれど今回、彼女はうつむかなかった。「大したことじゃない」「考えすぎだ」「みんな同じだよ」と言われたとき、心がどれほど冷え切ってしまうか、彼女は痛いほど知っていたからだ。彼には、そんな思いをしてほしくなかった。

悠斗は数秒間、彼女をじっと見つめ、それから不意に微笑んだ。それはいつものからかうような笑いではなかった。もっと静かで、もっと近くに感じられる微笑み。「君なら笑わないと思ってた」

美羽の指先に力が入った。ホットココアの缶が、手の中で少し熱を帯びて感じられた。何と言えいいのか分からず、彼女はただ小さな声で尋ねた。「悠斗君は.....いつもそうやって、溜め込んでいるんですか？」悠斗は両手をジャケットのポケットに突っ込んだ。「慣れてるから」

その五文字が美羽の心に落ちた。静かに、けれど確かな重さを持って。慣れている。彼女もよくそんな言葉を口にする。一人で昼ご飯を食べることに慣れている。「大丈夫」と言うことに慣れている。誘われないことに慣れている。言いたい言葉を飲み込むことに慣れている。自分だけじゃないんだ、と思った。

悠斗が再び歩き出し、美羽もそれに従った。「僕の家、ちょっと面倒なんだ」彼は言った。「親は僕が彼らの敷いたレールの上を歩くべきだと思ってる。でも、僕がそこからほんの少しでも外れると、もう人生が終わったみたいに大騒ぎするんだ」「終わった、ですか？」「うん。まるで人生がガラスでできていて、一センチでもズレたら粉々に砕け散るみたいにね」美羽は静かに言った。「それは.....すごく息が詰まりますね」悠斗はちらりと彼女を見た。「君、話し方がときどきお年寄りみたいだね」美羽は戸惑った。「えっ？」「でも、いいお年寄りだよ」「それ、褒めてますか？」「一応ね」

何か失礼なことを言ってしまったかと心配していたが、彼のその言葉を聞いて、かえって少し緊張がほぐれた。二人はあるビルの軒下に差し掛かった。前方には駅へと続く横断歩道があり、赤信号の残り時間はあと二十秒ほどだった。悠斗が唐突に言った。「不思議だな。僕、普段は他人にこんな話、滅多にしないんだけど」美羽は彼を見た。「それはきっと.....今日がたまたま雨だったから、ですかね？」口にしてから、雨はも

う止んでいることに気づいた。悠斗も夜空を見上げた。「雨、止んでるよ」「あ、じゃあ.....地面がまだ濡れているから、とか」「その理由はちょっと苦しいな」美羽は決まり悪くなって、顔をホットココアの後ろに隠したくなった。しかし、悠斗は低く笑った。「あるいは、君がすごく秘密を守るのが上手そうに見えるから、かもね」

その言葉は、まるで小さなピンのように、美羽の胸元に留められた。秘密を守るのが上手そう。そんな風に言われたのは、生まれて初めてだった。先生は彼女を「真面目だ」と言った。お母さんは「聞き分けが良い」と言った。クラスメイトは「大人しい」と言った。けれど、誰一人として、彼女を「安心できる存在だ」とは言ってくれなかった。

「私はただ.....口下手なだけです」美羽は言った。「口下手なもの、良いところはあるよ」「どんなところですか?」「面倒な方法で人を慰めたりしないところ」悠斗は前方を見つめたまま、今日の晩ご飯について話すかのような、気負いのない口調で言った。「人が落ち込んでるのを聞いた途端、慌てて『考えすぎるな』とか『みんな同じだよ』『ポジティブにいこう』なんて言う奴がいるだろう。あれ、聞いているだけで疲れるんだよね」美羽は深く頷いた。その感覚なら、誰よりもよく分かった。「君はただ、聞いてくれる」悠斗は言った。「それがいいんだ」

美羽は呆然とした。ただ、聞いてくれる。それがいい。彼女は自分の物静かさを、ずっと欠点だと思い込んでいた。面白みのない人間だから、誰も自分から話しかけてくれないのだと。気の利いた返しができないから、いつも場の空気を冷え込ませてしまうのだと。表現するのが苦手だから、お母さんに「大丈夫?」と聞かれても「うん」としか言えないのだと。けれど今、そのすべてに、悠斗が別の名前を与えてくれた。

聞いてくれる。秘密を守れる。安心させてくれる。

美羽は手元のホットココアを見つめた。缶の熱が手のひらに染み込み、一本の細い糸のように、指先から胸の奥へと繋がっていくようだった。こんな自分でも、誰かを安心させることができるのだ。

◇

青信号が灯った。人の波が前へと進み始める。悠斗はすぐには動かず、ただ彼女を振り返った。「白石美羽」「はい?」「今日のこと、誰にも言わないでね」美羽の心臓が小さく跳ねた。彼は少しきまり悪そうに、それでいて誰かに頼み事をするのに慣れていないような様子だった。「僕がこんな弱音吐いてたって知られたくないんだ。格好悪いから」「格好悪くなんてないです」「それでも、言わないで」「.....絶対に言いません」彼女は食い気味に言った。あまりにも早く。彼がこの話を打ち明けたことを、後悔してしまうのが怖かったから。悠斗は彼女を見て、ふっと笑った。「だと思った」

その言葉が、美羽の心の中のどこかに、ぽっと明かりを灯した。大きな光ではない。駅の自動販売機の中に灯る、あのささやかなランプのような光。けれど彼女にとっては、それだけで十分に足りていた。

駅の前に到着し、二人は別れる時間になった。美羽はホットココアを握りしめたまま、どうやって別れの挨拶を告げるべきか、急に分からなくなってしまった。「さようなら」は少し他人行儀すぎる気がする。「また明日」と言うのも変だ。明日また会う約束なんて、していないのだから。

悠斗は彼女を見つめ、それからスマホに目を落とした。「そうだ」「え?」「今度、テストで良い点取ってココアを奢ってくれるとき、連絡先がないと不便だよね?」美羽は固まった。その言葉はあまりにも自然で、ただ忘れていた小さな確認事項を補うかのように発せられた。けれど彼女の頭の中には、すぐにお母さんや先生から言われてきた警告が鳴り響いた。

—簡単に見知らぬ人と連絡先を交換してはいけません。—特に、自分より年上の男の人の場合は。

彼は悪い人には見えない。けれど、そう見えないからといって、本当に安全だとは限らない。美羽はスマホを強く握りしめた。悠斗は彼女の躊躇（ためら）いを察したように、苦笑した。「不都合なら無理しなくていいよ。何しろ、僕は怪しい高校生だからね」「自覚はあったんですね」「最低限の自覚はあるつもり」彼はそう言うと、本当にスマホをポケットに仕舞い込もうとした。無理強いするわけでもなく、傷ついたような表情を見せるわけでもなく、「僕のことが信じられないの?」と責めるわけでもなかった。

けれど、彼が何も言わなかったからこそ、美羽はかえって胸が締め付けられるような気がした。もしここで断ったら、彼はさっきあんな話を打ち明けたことを、恥ずかしいと思ってしまうのではないか。彼は、せっかく勇気を出して家のことを話してくれたのではないか。誰にも言わないと約束した。けれど、もし連絡先を交換しなければ、二人はただの「塾の近くで偶然出会っただけの人」になってしまう。もう二度と、会えないかもしれない。その予感が、彼女を少しだけ焦らせた。

「.....いいですよ」美羽は自分の声がそう発するのを聞いた。悠斗が足を止める。「本当に?」「はい」彼女はスマホを取り出した。「ただ.....変なものは送ってこないでくださいね」悠斗が眉を上げた。「例えば?」「例えば.....ホラー画像とか」「君の『変なもの』の定義、すごく健全だね」

彼はスマホを取り出し、LINEを開いた。アカウントを交換するとき、美羽の指先はかすかに震えていた。彼女はただのクラスメイト同士のやり取りであるかのように、必死で平静を装った。悠斗のアイコンは、黒い背景に浮かぶ月。名前はアルファベットの一字だけ。『Y』一方、美羽のアイコンは、学校の近くの桜の木の写真だった。春に撮影したもので、ピンクの花びらが満開に咲き誇っていたが、彼女は一度もタイムラインに投稿をしたことはなかった。

友達追加が完了すると、悠斗からすぐにスタンプが送られてきた。ぐったりとうつ伏せになっている猫のイラスト。その下には『確認完了』と書かれていた。美羽は思わず笑ってしまった。「どうしてそのスタンプなんですか?」「この猫、学校に行きたくなさそうな顔をしてるから」「悠斗君も、学校に行きたくないんですか?」悠斗はス

マホをポケットに仕舞い、淡々と言った。「毎日行きたくないよ」あまりにも堂々と言うものだから、美羽はなんと返していいか分からなくなってしまった。

別れ際、悠斗は彼女の手にあるホットココアを指差した。「家に帰ったら、温かいうちに飲みなよ。冷めるとただの怪しい砂糖水になっちゃうから」「うん」「それから、明日はそんなに陰しい顔をして授業を受けないこと」「陰しい顔なんてしてません」「してたよ。数学に命を狙われてるみたいな顔」「.....気をつけます」悠斗は笑った。「じゃあね。気をつけて帰るんだよ、美羽」

美羽は一瞬、息が止まった。彼は「白石」とは呼ばなかった。「白石さん」でもない。「白石美羽」でもない。「美羽」と呼んだのだ。あまりにも自然に。自然すぎて、拒絶する理由すら見つけられなかった。

「.....気をつけて」彼女は小さな声で言った。「悠斗君」口にした瞬間、そのまま駅の中へ逃げ込みたい衝動に駆られた。しかし悠斗は、何事もなかったかのようにただ手を振った。「また明日。あるいは明後日。運命の神様がシフトに入っていればね」「運命の神様にもシフトなんてあるんですか?」「東京都の運命のシフト管理はかなり厳しいんだよ」美羽は笑った。今度は、笑いを堪えるのをやめた。

◇

家に帰ると、母親はすでに帰宅していた。食卓には温め直された煮物が置かれ、白い湯気が器から立ち上っていた。テレビがついており、アナウンサーが平坦な声で天気予報を伝えている。リビングには、洗剤の匂いと温かいスープの香りが漂っていた。「今日は少し遅かったのね」母親が尋ねた。美羽が上着を脱ぐ手が、ほんの一瞬、止まった。一秒。ごく短い一秒。けれど彼女は、自分が一本の細い境界線の前に立っていることを自覚していた。

昨日傘を直してくれた人に会った、ということもできた。駅の前で高校生と話をしていた、ということもできた。けれど、そんなことを言えば、お母さんはきっとあれこれと質問攻めにしてくるだろう。その人は誰? どの学校? どうして知り合ったの? 連絡先なんて交換していないでしょうね?

美羽は答えたくなかった。悪いことをしたいからではない。ただ、この出来事を複雑にしたくなかったのだ。雨の夜に温かいミルクティーをくれたあの人が、大人の心配というメスで解体され、検査され、ラベルを貼られた挙げ句、「もう連絡は取らない方がいい」という一言で片付けられてしまうのが、どうしても嫌だった。だから、彼女は言った。「塾の先生が、居残りで少し問題を解説してくれたの」

嘘がリビングに落ちた。とても小さな嘘。床に落ちた一本の髪の毛ほどの、些細な嘘。母親は気づかなかった。「そう。最近塾も大変ね、無理しすぎないようにね」母親は彼女にご飯をよそってくれた。「何かあったら言うのよ。一人で抱え込んだらダメだから」美羽はお茶碗を受け取った。「うん」

彼女はうつむいてご飯を食べた。煮物は温かく、じゃがいもは柔らかく煮えていた。お母さんの味はいつも通りなのに、どうしてか胸の奥がちくりと痛んだ。悠斗のために、お母さんに嘘をついたのは、これが初めてだった。いけないことだとは分かっている。けれど、もう一つの声がすぐに頭をもたげた。嘘をついたんじゃない。ただ、秘密を守っているだけ。悠斗は、彼女が秘密を守るのが上手そうと言ってくれたのだから。

美羽は箸をくわえたまま、お茶碗の中のご飯を見つめた。秘密とは、こういうものなのだと知った。最初に手にしたときは、とても軽い。ほんのりと、温かいくらいだ。

◇

夕食の後、美羽はzお風呂に入り、髪を乾かして自分の部屋に戻った。ドアを閉めると、すぐに引き出しを開けた。昨日のミルクティーの空き缶がまだそこにあった。その隣に、今日のホットココアの空き缶を並べた。本当は帰り道で捨てるつもりだったのに、どうしてか結局、持って帰ってきてしまったのだ。二つの空き缶が並んでいる。二日分の秘密のように。美羽はそれを数秒間じっと見つめ、自分がなんだか酷く奇妙な人間に思えてきた。手を伸ばし、やはり捨ててしまおうとしたその時、スマホが震えた。

彼女の身体が硬直した。画面が明るくなる。

『Y：家着いた？』

美羽はスマホを握りしめた。たった四文字。家着いた？ それなのに、彼女はそれを長い間見つめていた。心臓が小さな花火に火をつけられたかのように、パッと胸の奥で細やかな光を放った。彼女はベッドの端に腰掛け、文字を打ち込んだ。

『美羽：着きました。今日はありがとうございました』

メッセージを送信してから、また後悔が押し寄せた。普通すぎるだろうか。スタンプでもつけるべきだったか。堅苦しすぎないだろうか。彼女は画面を見つめたまま、瞬きをすることさえ忘れていた。すぐに返信が来た。

『Y：言ったじゃん。点数上がってからにしてって』

美羽はその言葉を見て、口元が自然と綻ぶのを止められなかった。

『美羽：じゃあ、もしずっと点数が上がらなかったら？』

送信した瞬間、彼女はスマホをベッドの上に放り出した。恥ずかしい。これではまるで甘えているみたいではないか。取り消したいと思ったが、もう既読がついてしまっていた。数秒後、スマホが再び震えた Lights。

『Y：その時は、ずっと待つしかないね』

美羽はスマホを胸に抱きしめた。自分の顔が、まるで電子レンジから取り出したばかりの肉まんのように熱くなっているのを感じた。ダメだ。こんな風になっては。ただのメッセージのやり取りじゃないか。彼はただ冗談を言っているだけ。こんな言葉一つで、これほど舞い上がってはいけない。

けれど、どうしても抑えきれなかった。彼女はもう一度、その言葉を開いて読み返した。

—その時は、ずっと待つしかないね。

そんな風に言ってくれた人は、これまでの人生で誰もいなかった。点数が上がるのを待ってくれる。自分が少し変わるのを待ってくれる。自分が話を終えるのを待ってくれる。「大丈夫」と強がるのをやめるのを待ってくれる。

スマホがまた震えた。『Y：今日のココア、美味しかった？』『美羽：すごく甘かったです』『Y：昨日のミルクティーより甘かった？』『美羽：同じくらいです』『Y：じゃあ、君の糖分耐性はかなり高いね』『美羽：普段あまり飲まないからかもしれません』『Y：じゃあ、次はコーンスープにしよう』

美羽は手を止めた。次。また「次」だ。今夜、その言葉は彼女の心の中で、ますます本物の約束としての重みを増していった。

『美羽：自販機のコーンスープって、あまり美味しくないですよ？』『Y：確かに不味い』『美羽：じゃあどうしてそれに変えるんですか？』『Y：不味いものの方が、一緒に文句を言い合えるから』

美羽は画面を見つめながら、ついに声を上げて笑ってしまった。小さな笑い声だったが、静まり返った部屋の中では酷くはっきりと響いた。彼女は慌てて口を塞ぎ、部屋のドアに視線を走らせた。外からは何の音もしない。ホッとして、再びスマホに目を落とした。

『Y：明日も塾あるの？』『美羽：あります』『Y：お疲れ様、中学生』『美羽：悠斗君は塾はないんですか？』『Y：僕はもう塾地獄からは卒業したんだ』『美羽：おめでとうございます』『Y：ありがと。まあ、今は別の地獄にいるけど』『美羽：高校ですか？』『Y：人生』

美羽はその二文字を見て、笑ってしまいそうになりながらも、彼が本当に少し疲れているのではないか、という気がした。彼女は文字を打った。

『美羽：今日言っていたこと、もし嫌な気持ちになるなら、考えないようにしてもいいですよ』

送信した直後、なんて的外れな言葉だろうと自分を責めた。考えないようにする。そんなの、あの「考えすぎるな」という慰めと何が違うというのか。彼女は慌てて続けて打ち込んだ。

『美羽：私の言いたいのは、もし話したいことがあれば、私、聞きますから。話したくなければ、それでも全然大丈夫です』

今度は、相手からの返信が来るまでに少し時間がかかった。

『Y：君、本当に聞き上手だね』

美羽はその文字を見つめた。どうしてか、目頭が不意に熱くなった。自分は頭が良いわけではない。面白い人間でもない。友達がたくさんいるわけでもない。時として、自分の感情すら上手く説明できない。それなのに彼は、自分を「聞き上手だ」と言ってくれた。それはまるで、今までずっと無視され続けてきた自分のパズルの一片が、初めて誰かに必要とされたかのような感覚だった。

『Y：君にこういう話をするのは、僕を笑わないって分かってるからだろうね』 美羽はすぐに返した。『美羽：笑いません』 『Y：うん、知ってる』

画面上の文字はとても小さかった。けれどそれを見つめていると、美羽は自分の部屋に、もう自分一人だけがいるのではないような錯覚を覚えた。机の上の教科書も、単語帳も、スケジュール帳もそのままそこにある。お母さんがリビングで食器を片付ける音もまだ聞こえる。けれど、彼女の人生には、家族も友達も誰も知らない、細い秘密の抜け道が一つ、新しく開通したようだった。

その先には、佐伯悠斗という人がいる。彼は、自分が昨日階段口で泣いていたことを知っている。テストの点数が悪かったことを知っている。自分が話を聞くことができるのを知っている。そして、自分が秘密を守れる人間だということも、知っている。

◇

夜の十一時、母親がドアをノックした。「美羽、そろそろ寝なさいね。あんまり遅くまで勉強しちゃダメよ」 美羽はビクツとして、スマホを慌てて枕の下に押し込んだ。「はい」 母親は部屋には入ってこなかった。足音が遠ざかっていく。美羽は数秒待ってから、スマホを再び取り出した。突然、激しい罪悪感が込み上げてきた。けれど、スマホの画面がまた明るくなった。

『Y：もう寝る？』 『美羽：うん、お母さんに寝なさいって言われました』 『Y：良い子の時間だね』 『美羽：からかわないでください』 『Y：じゃあ、優良中学生の消灯時間』 『美羽：余計に変です』 『Y：じゃあ、おやすみ、美羽』

美羽はその一行を見つめた。

—おやすみ、美羽。

白石さんではない。白石でもない。美羽、だ。

彼女はスマホを枕元に置き、入力欄をじっと見つめたまま長い間固まっていた。最初はこう打った。『おやすみなさい、佐伯君』 すぐに消した。他人行儀すぎる。もう一度

打ち直した。『おやすみなさい、悠斗君』送信ボタンの上で指が止まる。これではいささか馴れ馴れしすぎるだろうか。けれど、今日別れるときに、すでに一度そう呼んでしまっていた。それに、彼だって自分のことを美羽と呼んだのだ。だから、きっと大丈夫。

彼女は送信ボタンを押した。『美羽：おやすみなさい、悠斗君』

メッセージの横に、すぐに「既読」の文字がついた。『Y：明日は数学に命を狙われないうちにね』

美羽は思わず顔を枕に埋めた。そして、笑った。大きな笑い声ではない。まるで子猫が秘密の場所でゴロンと寝返りを打ったかのような、誰にも知られたくない、ささやかな微笑み。

窓の外に雨は降っていなかった。東京の夜空は都会の明かりに染められてどんよりとした灰色で、星一つ見えなかった。遠くから時折車の走る音が聞こえ、台所では冷蔵庫が低く唸りを上げている。家の中は何もかもがいつも通りだった。

けれど美羽は知っていた。何かが、もう決定的に変わってしまったことを。

彼女には、お母さんには決して言えない人ができた。スマホが震えるたびに、心臓を高鳴らせる名前ができた。秘密が、できた。

その夜、白石美羽は、自分に「秘密の友達」ができたのだと思い込んでいた。彼女はまだ知らなかった。ある秘密は、最初はとても軽いということを。羽毛のように、どこまでも軽い。けれどそれはやがて、呼吸をすることさえ困難になるほど、重くのしかかってくるのだということを。

— 第二章 終 —